

UPDATED 11.19.2006

ネパール・ジャズ紀行

フランソワ・キャリリール：サクソ奏者／在モンリオール

特別
寄稿

フランソワ・キャリリール Francois Carrier : 1961年6月5日カナダ・ケベック州 Chicoutimi 市の生まれ。1990年トリオを結成、オリジナル楽曲による1stアルバム『Poursuite』を制作。1997年2ndアルバム『Intuition』を制作、アルバム・オブ・ジ・イヤーにノミネートされる。1998年ヨーロッパ・ツアーでモントルー・ジャズ・フェスに出演。同年、NoEMI (ヌーベル・アンサンブル・ドゥ・ムジーク・インプロヴィゼー) を組織、デュムイ・レッドマンらと共演。3rdアルバム『Compassion』(Naxos Jazz) 制作。Juno Awardでベスト・コンテンポラリー・ジャズ賞受賞。2001年ユリ・ケインをゲストに4thアルバム『All'Alba』(Justin Time) 制作、奨学金を得て6ヶ月間ローマに留学、作曲に励む。2004年、ポール・ブレイ、ゲイリー・ピーコックを得て『Travellin' Time』(Justin Time) 制作。最新作はマット・マネリ (via) をゲストに迎えた2枚組ライブ盤『Happening』(Leo Records)。



ドラマーのミシェル・ランベールと僕がネパールのカトマンズに到着したのは2006年10月12日のことだった。僕たちは、ネパールのジャズ・ドラマーで音楽監督でもあるナヴィン・チェトリが組織したジャズマンズ (Jazzmandu) というジャズ・フェスティバルで、2度にわたって即興演奏を披露したのだった。



カトマンズの僧侶とともに

今年で5回目を迎えたこのコンサートに、ナヴィンは僕たちをトリオで招待してくれたのだが、もうひとりのミュージシャン (ベーシスト) が参加することができなかったのだ。カトマンズまでの旅は30時間ほどかかり、到着したのは木曜日の午後だったが、僕たちは疲れきっていた。10月10日にモンリオールを出発、パリでインドのデリーへのフライトに12時間のトランジットを過ごし、デリーでは3スターのホテルに投宿した。デリーでの滞在は短いものだったが、僕たちが大きなカルチャー・ショックを受けるには充分だった。しかし、僕たちが本当のスリルを味わったのはカトマンズに滞在してからだった。最近送ったナヴィン宛のeメールで、僕は「僕の生涯で、ネパールの人たちほど心の奥底から触れ合える人たちはいなかった」と記した。



カトマンズの僧侶とともに (2)



モンキー・テンプル



モンキー・テンプル (2)

僕が言いたかったことは、僕たちがネパールの土を踏

んだ瞬間から僕は非常に深い愛のエネルギーを感じた、ということだった。僕たちのネパール滞在は4日間に過ぎなかったけど、しかしこの感情は一生消えることはないだろう。僕はずっと自分が満足と幸せの神、布袋（ほてい）になったような気分でのいたのだ。

もちろん、ミシェルと僕は演奏をするためにカトマンズに出掛けたのだから、10月13日の金曜日にはシンガポール出身の男が所有するリゾート、ゴカルナ（Gokarna）で最初の演奏を披露した。フェスティバルに招待されたグループが、夕方の6時から深夜12時まで1グループ30分ずつ入れ替わり演奏した。地球のあちこちから参加したミュージシャンが演奏する音楽の坩堝（るつぼ）に身を置くことは面白いことではあったが、大部分は音楽的にはそれほどの内容のものではなかった。音楽監督のナヴィンは、10日間にわたるフェスティバルに出演する半数のグループでドラムを叩いている、ということだった。音楽のスタイルなど気にしない土地柄でナヴィンがスタンダード・ジャズを演奏するには良い機会だったようだ。

僕たちは決して妥協することなく僕らの即興演奏を披露した。つまり、僕たちだけが真にホンモノのジャズを演奏したということだ。しかし、もっとも大切なことは、僕たちの音楽はネパールの人たちがこれまで聞いてきたどの音楽とも違っていてもかかわらず存分に楽しんで聴いてくれたことだ。ジャズマンズに招待されるミュージシャンが演奏するのは、スタンダードかビッグネームの悪しきコピーと相場が決っているからだ。いつものように僕は僕らの演奏をレコーダーで記録するのを忘れなかった。

翌日、つまり14日の午前中のことだが、僕は2人の若いネパールのフルート奏者をホテルの部屋に招き、ミシェルと僕の4人で録音を試みた。結果は、2曲20分、完全な即興によるとても素晴らしい演奏を収録することができた。彼らの名前はクリシュナ・タパ（Krishna Thapa）とダーン・バハドゥール・グルンジ（Dhan Bahadur Gurunj）。ところが昼過ぎになってミシェルの具合が悪くなった。おそらく食当りだろう。僕は彼を部屋に残し、ジャズマンズの平和行進



ふたりの美人通訳と



ミシェルと僕



祈りの旗



ロスト・イン・カトマンズ



サミット・ホテルの近くで

に出掛けた。この、アップステアズ・ジャズ・バーをスタートしたパレードは、ラジムパットからシャングリラ・ホテルまで続くものだが、カーニバルに似た雰囲気、ヴィンテージ・バイク、自動車、ジャズ・ミュージシャン、子供たち、マルニ・ダンサー、ラクヘ・ダンサー、フォーク・ダンサー、マリッジ・バンドなどが連なって各々「ミュージック・フォー・ピース」の幟（のぼり）を掲げながらラジムパットの街並を下って行くのだ。日が暮れる頃、宿舎のサミット・ホテルに戻ってみたらミシェルはまだ眠っていた。

翌日になるとミシエルの気分も快復したので、ヴァレー・ジャズと呼ばれる夜のイベントでドラムとサクソフォンの演奏を披露した。その夜は他にもう1組のデュオが演奏したが、ノルウェーのヴォイスとエレクトロニクスのコンビだった。僕らは夜空の下でネパール人を中心としたとても素晴らしい聴衆のために演奏したのだ。この夜の1時間にわたる演奏もとても素晴らしく、記録に残す意味があった。

16日は、ミシエルと僕は別れ、ゲストとしてそれぞれ他のバンドに加わって1曲ずつ演奏した。僕は、ネパールのとてもユニークな伝統音楽の歌手グル・デヴ・カマート (Guru Dev Kamat) と共演したが、とても面白い経験だった。ミシエルは混成バンドで<イン・ア・センチメンタル・ムード>というスタンダードを演奏した。この夜は、パタン・ミュージアムでも演奏でき、とても刺激的だった。

もちろん、数回のコンサートの他に、僕らは短時間だったがカトマンズ観光も経験することができた。古い仏教のお寺、モンキー・テンプル(Swayambunath Stupa)も訪問した。そこで200枚近いスナップを撮ったが、心の奥底に触れる体験で、愛とスピリットに満たされたのだった。全行程で撮った写真は1001枚に及んでしまった。

ミシエルと僕は17日には帰国しないといけなかった。午後2時にはカトマンズ空港を発したが、モントリオールに帰着したのは36時間後であった。



平和行進



2人の退役日本人写真家



祈りの旗(2)



パタン・マーケット

もちろん、短いカトマンズ滞在中にはいろいろな事に遭遇したが、もっとも大切なことはカトマンズのひとりひとりから愛と平和の思いを感じとったことだ。カトマンズの空気を知ってしまった今、僕はおそらく彼の地を再び訪ねて、あの不思議なエネルギーをもっと知ることになるだろう。一方、ネパールの人たちは、目を大きく開いて、平和への希求をあなた方に伝えるだろう。ネパールは貧困と汚染とカオスに喘いでいるが、人々の心は恐れに打ち勝つほど強いものを持っている。

僕らが彼の地で演奏した音楽を聞いてもらえればその思いを実感してもらえるはずだ。

もの事が計画通りに進めば、ミシェルと僕は来年10月と11月、日本と中国を廻ることになるはずである。

愛と心とスピリットを持って。

関連リンク：

インタビュー

<http://www.jazztokyo.com/interview/v39/v39.html>

CDレビュー

<http://www.jazztokyo.com/newdisc/komado/286.html>